

## 文体論雑感

能登 恵一

我々は言語共同体に属するものであり、記号としての言語は我々の思考を伝達することで人間相互の交渉を成り立たしめる手段である。それはまた同時にこうした思考は言語としての記号によって確立され、時には分析されながら我々の知識を支えている。我々のこうした特定の体系をもつ言語記号はさまざまな規則によって成る構造をもつ。言語なくしていかなる思考作用も伝達もそして当然のことながらその理解も殆ど不可能に近いといえよう。何かある事柄を言語活動によって伝達しようとする場合、共通する言語の中から表現する上で伝達しようとする意味内容に最も適した記号を選び出す。従って、言語は表現の様式であると同時に我々の判断などを具体的に表す行為である。そしてこの伝達の実受容者はその記号を認識し、伝達に相応した効果を自らの内に喚起するのである。

テキストの在り方を標榜する「文体論」は原理的には極めて明白ではあるが、実際のところはその複雑さのために定義がしにくいし、また扱いにくい対象でもある。(ギロー 1973: 212) しかも「文体 (= Stil)」という語そのものが個別的な言語行為としての文体とテキストの文体といった二通りの解釈がなされることさえもある。たとえば、H. ザイドラーは文体を「その広がりや深みの中で人間的なものが言語作品において現れた組織である」(Seidler 1963: 58) としているし、B. ザンディヒは「ここでは文体は二つの意味で使う：個々の言語行為である文体とテキストの文体は区別しない。文体は原理的にはテキストの特性として記述されるべきものだからである」(Sandig 1978: 43) とするのに対して、G. ムーナンは「文体は人間的な現象で非常な複雑性をもつ。文体は多数の要因の結合から生まれる言語的合力である」(ムーナン 1970: 219)

としているし、M. リファテールは「文体とは、言語構造によって伝達される情報に、意味をねじ曲げることなく付加された強調（より豊かな表現にするためのもの、情意的なもの、もしくは美的なもの）である。」（リファテール 1978：31）としている。このように「文体」という概念そのものが確定されていない。しかも「文体論」というこの術語自体が様々な種類の言語分析を指すのに使われており、文体論はその研究者の数に応じた定義があるとさえ云われている。このようにいろいろな解釈される理由には大まかにいえば二つある。その一つが、いろいろな研究者が言語構造に関する様々な理論をたたき台としていることが挙げられる。今一つとしては、「文体」という語が言語の数多くのかかなり多様な面を指すのに用いられているということである。このように「文体」という概念そのものが実にたくさんの様相を呈しているわけだが、その方法である文体論も百花繚乱のさまを呈しており、基準も定まっていないというのが現状である。たとえば、テキストの起源やその作者の立場に立つ文体論もあれば、その目標に立つ文体論もあるし、またその言語手段そのものに観点を置く文体論もある。このようないろいろな見方や観点がそれぞれの独特な定義あるいは必要性をもっており、文体論はその歴史を通じてそうしたものを受け継いできている。いずれにしても、文体はすべてのテキストに存在し、いつでも作者の独特の表現形式となって現れる。

文体論を歴史的観点からみると、文体を原因論と目的論にわけて考える観念論的文体論と実証主義的文体論に大別することができる。K. フォスラーやL. シュピツァーを創始者とする観念論的文体論は表現の性質を決定するものはその作者と作品の題材であるとみなす。何かある事柄を表現する場合、それに対応する形態が選ばれるわけだが、その根底にあるのは、作者の性質、気質あるいは教養、社会的階級、世界観がおのずとある表現形態を選び出すのだという考え方である。（ギロー 1973）この選択は意識的なものではなく、対象に結び付いたコトバが自然に推し出されてくるようなもので、そこでは形態は個人的な性質と密

接なつながりをもって、作者の人間性そのものが発現されるというように考えられている。つまり、この観念論的文体論は「何が」「どのように」表現されているかという言語事実を考察することから、さらに進んで「なぜ」その表現形態が出現したかについて深く内面的に究明しようとするものである。従って、この観念論的文体論にあっては、その観察の対象は表現というレベルに置かれるわけだが、その結果が生ずるプロセスへと観点を移していった、その表現の本質へと突き進み、それを明らかにしようとする。こうした観念論的文体論の基本理念に共通していることは、文芸作品の中に内容と形式が作者の人間性の中で相互に関連しあいながらまとめあげられてゆくプロセスを、究極的には直観によって見てゆくという態度であるといえる。さらにザイドラーは「文体論の役割が文学に関連して述べられる必要があるれば、文学の対象を明確にしなくてはならない。しかし、文学においてはまとまったものはない。とはいっても一つだけ確実に云えることがある：文学が一つの独立したまとまりのある学問でなければならないとすれば、その対象は独自性をもって、概念的には明確に限定されたものでなくてはならない。あるいは又、こうした対象に対する極めて明白な概念的に限定されたアスペクトをもつ必要がある。文学は言語的なものと関わらなくてはならないのである。言語は文学の始まりなのだ。まず言語であり、次いで事柄である。しかしその対象は技巧の言語である。つまり、言語が完全な存在となり、最も深い人間性の構造がその作品の構成の中核をなしているような言語作品において、言語は人間の本質的なものから世界を作り出している。そういった作品を対象とするのである。これにより、こうした言語作品に対する新しい科学的問題設定がいくつも出てくる。言語芸術は（言語構成、理念の構造、想像力、人間の独自性等の）特殊な構造を成し、それゆえに独自の科学研究と描写を可能にするのである。文学が負う任務がそこにある。文学は言語芸術作品に関する学問である。文学は言語作品についての科学である文献学の枠の中にある。」(ibid : 67 ~ 68) このように観念論的文体論は、その対象を作者の技術

や技巧ではなく、作者固有の独自性をもつコトバの創作過程そのものを考察しようとするもので、その根底には個人の創作的活動としてのエネルギーに研究の中心課題が存在するという立場をとる。

これに対して、目的論としての実証主義的文体論は作品の目的はその媒体である言語記号を外へ、つまり受容者たる読者へと差し向けることであるとの立場をとる。そうした作者の意図は意識されずに実現できることもあるが、往々にして意識的になり、さらには意図的になる傾向をもつ。そうなればその対象は当然のことながら分析され、体系化され、範疇化されてゆくことになる。すると実証主義的文体論は考える。作者の技術を作品が目指す目的とそれに適応した表現形態の選択について筋道をたてて深く考えてゆくものだという立場をとるのである。従って表現形態は作者の性質の発現ではなく、作者の意図の現れだとする態度がこの実証主義的文体論の基本姿勢である。このように目的論としてのこの文体論には言語形式をいわば美的観点から分析しようとする基本的原理がみられる。なるほど、表現形態は必ず伝達を目的とする限りにおいては、それは必ず読者へと向けられて規約化される傾向をもつ。これはすべてのコミュニケーションの側から要請されているものであり、コミュニケーションが成立するための必要な条件である。V. リーも指摘している通り、文学を文学たらしめる第一の要素としては作者が提起した心象風景に対して、読者の中にそれと類似した心象風景が喚起される必要があるといえよう。(リー 1975) そしてそのためには当然のことながら作者の心象あるいは思想を最もその場に適した意味の語あるいは言い回しで、そしてさらには響きのよいコトバで表されなくてはならない。つまり、ある事柄を伝えるにはその主題に適した表現形態が必要になるわけである。これは R. ヤコブソンが言語の機能について言及したことと同じである。このような原理に立って文体というものを考えてみた場合、文体とは「思想の実質あるいは表現内容というよりも、むしろ表現形式および表現にぞくする文学的文章の特質であり、個々の作家なり、流派なり、時代なりに特有の表現形式、一作家の表現様式を、とくに明晰、

効果、美といった方面からながめたもの」(小林秀夫 1976:131)ということになる。この文体論はソシユールの用語であるラングの事実、つまり社会の言語をその研究課題としている。そしてさらに、この実証主義的文体論は、そうしたいわゆる文学的な性質を帯びた文章様式をその表現形式の効果、もっと言えば、美的効果のレベルで考察することがこの文体論の特徴であると考えるのである。このように言語形式をいわば言語の美的観点から分析しようとする基本的態度がこの実証主義的文体論にみられる。こうした考え方に立って、実証主義的文体論を築いたのがS. バイイである。バイイにあっては、文体論はすべての言語における表現手段 - これには当然表現的效果とその機構を含むわけだが - の研究である。こうした原理に立つ文体論はこれまで述べてきた通り「表現手段の文体的価値を研究するものである。」(ギロー 1959:73)そして表現者たる作者は常に「生み出された効果と意図された効果との間の相違をできるだけ少なくして、表現者の意図を読者に伝えようとしながら素材を配列し、語を選択する。表現者は相手をできるだけ自分と同じ思考、情緒、印象を実感してほしいと思うのは当然であろう。それを実現するために、作者は、いわば自分を選択してある道を通して、目的地まで読者を操縦していかなくてはならない、一方、読者の方は必ず作者の意図する方向に行くとは限らない。作者はたえず読者の先を越して、常に読者を意図した道に保っておかなくてはならないわけである。」(リー 1975:53) このように実証主義的文体論の「特性は、何らかの言語表現が、記号として読者の注意を惹きつける、あるいは喚起する特性の研究である。」(リファテール 1978:99)しかし、この実証主義的文体論の先駆者ともいえるバイイはあくまでも日常的な自然発生的な発話である言語記号が言語の中で一つの体系をなす構造化した価値を研究するものであるとする立場をとり、文学作品は文体研究の対象としていない。しかし、それでもバイイが分類した言語の自然的効果と喚起的効果という考え方が基礎にすえられて、後に実証主義的文体論は少なからず文学研究に貢献したのであった。バイイが唱える自然的効果とは簡単に言えば、

同義語の対立から生じる感情的効果であり、喚起的効果とは、ある表現形態の対応が社会的な階層の喚起を通じて生じる感情的効果である。バイイの弟子、M. クレツソはバイイの文体論のこの枠を取り払い、文学作品を文体論の研究対象とし、文学的手法を分析したことで知られている。しかし、クレツソは文学作品の手法、つまり表現形式の分析はするのだが、作品の分析まではいたっていない。バイイ派の文体論は言語体系の内部の構造とその構造の働きを考察するもので、いわば表現手段の文体的価値を研究するものであった。こうした理念に立って、さらにこの表現の価値について、ギローは概念的価値、言語の知的価値そして社会的環境に左右される表現的価値と、そして表現者が何らかの効果を意図した意図的価値とに分類したうえで、このうちの表現的価値と意図的価値が認められるときに文体の効果が生まれるのだとしている。それではその効果はどのように生じるのかといえば、一方では音、形態、構造などから生じる自然的効果であり、他方はこれらの構造とそれが使われる状況は環境とのつながりから生まれる喚起による効果である。

文体の効果は同義語あるいはもっと広い意味での同義性の存在、つまり同じ一つ概念あるいは事柄、現象を表す言語表現がいくつもあって、作者がその中から最も適した表現形態ないしは様式を選ぶことができるということを前提として成り立っている。その後の実証主義的文体論は、作者が意図した表現的効果と読者が抱く印象的効果を追求しようとする傾向にあり、その特性はリファテールが指摘するように、何らかの言語表現が記号として読者の注意をひきつける、あるいは喚起する特性の研究であるといえる。

このように表現形式という観点に中心を置いたうえで、文体論を考えてみると、文体とは言語を媒介として伝達された内容に、伝えようとする意味を変えずに、なお豊かな表現にするために感情を押し込めたり、美的な要素を取り入れた美的表現であるということができよう。こうした意味での文体論の課題は作者が意図したものなかで、とりわけ意図的なこと、意図されたことを伝える特徴、しかもその特徴がその作品に

きわめて大きな意味をもつものを選び出すということと云えよう。しかし、それは客観的で実証主義的な方法にとどまろうとするあまり作品の価値判断は文体論の外の仕事であろうとして、文学作品そのものの分析にはあえて入らないようにしようとする傾向がみられる。しかし観念論的文体論のように、言語はいわばたまたま思想を被った衣にすぎないとみなす原理は妥当性に欠けると云わざるをえない。文学あるいは一つの文学作品が何らかの思想性をもっていようと、あるいはある種のコミュニケーションを形成するといった意味で文学というものが読者との弁証法の上に成立するによせ、文学を文学たらしめているものは言語に他ならない。我々は自己および他者の自立性を組織するにあたり、制御したり行動する手段として言語を媒介としている。言語機能をまったく言語の外から説明しようとしたりする、あるいは言語の様式がもつ役割を十分に評価しようとしめない方法、つまり、言語構造の分析を基盤としない説明は、極端な言い方をすれば、文学とは何たるかという問いに答えられないのではないかという素朴な疑問が生じる。つまりは文学あるいは作品を理解し、了解するのはコトバを介在するからであって、文学の内的なものがそのコトバにおいてだけ完全に汲みつくされるのだと考えれば、文学はどこかのレベルでは客観的に理解されるべき表現を見出すことでその存在性をもっていと云えよう。もちろんあるレベルでは文学研究の対象はまさに直接的な印象が我々に明らかにしてくれものであろうし、我々の心をつかむのを我々が理解するという、それが文芸学の本来の目的であるとしても、(それでも矢張り文学作品の自立性は当然認めなくてはならないわけだが) それと並行して文学作品のコトバの解釈を研究の出発点として、作品の様式的価値にその本質を求めようとする態度も重要な要素であるだろう。しかし、だからといって文体分析が作品を勝手に切り刻むことだけに終始してはならないことは言を俟たない。もちろん「特定の作家あるいは作品の中の表現手段の使用頻度あるいは他の作家または他の作品と比較した場合の偏差や品詞などの分布の状態、文の長さなどの比較調査といった方法」(倉又 1980: 246) も、

それはそれなりに心理学的見地に立って見た場合には意味があろうし、時代様式を発見したりするうえでの価値は認められようが、それは矢張り究極において文学との係りを標榜しようとする文体論を確立することはできないだろう。しかし、たとえば統計的方法に立つ文体分析の場合には数の中に美学上の法則があり、その構成は美へとつながるといった考え方もあるが、数量的な点を文学の判断の基準とするには言語の持つ伝統的な意味を考慮するのでなければ文学との関わりは希薄になってしまわざるをえない。つまり、統計的な方法に立脚するにせよ、その結果が当該の作品に対してどのような効果をもつかを煎じ詰めて究明しなくてはならないと考えられる。実際のところ文学研究は言語行為を媒介として作者の意識まで遡るものでなくてはならないだろうが、言語学的方法はそこまでは適用できないまでも、作者の〈書く〉という行為とその結果たる〈作品〉とを関連づける方法が確立されなくてはならない。

主として日常言語を対象として展開されてきた近代言語学の論理と技術が様々な角度から文学の分析を試みようとする研究は多い。だが、果たしてそれがこれまでの文体論とは違った局面をもちうるものかどうか、主として文体論において指摘されることの多い逸脱の問題を考えてみた場合、作品における逸脱を生成する能力およびその逸脱が作品の中で何らかの有効性をもつうえでの規則性を打ち立てるという試みがなされるのでなければ、きわめて主観的なレベルにとどまり、客観性を目指す文体論の任務からははずれてしまい、実に曖昧模糊とした分析で終わってしまうと云ってもあながち過言ではないだろう。

ここでM. ビーヤビッシュが提唱する逸脱の規則性を概観してみることにする。ビーヤビッシュは詩の対象は言語現象であるとしたうえで、「詩学の対象は文学テキストに含まれている特殊な規則性であり、又その特殊な効果を規定している規則性であると同時にこのような構造を作り出し、かつその効果を理解できる能力、つまり一般に詩的能力といわれているところのものである」(Bierwisch 1971: 50～51)と云い、逸脱の規則性を次の図式によって説明を試みている。



Satz  $\rightarrow$   $\mathbb{G}$   $\rightarrow$   $S_1, S_2 \rightarrow S_3 \dots$

個々の言語行為（発話と理解）の能力は規則体系  $G$  によって記述される。 $G$  の左側の Satz はインプットとしての文であり、 $G$  によりアウトプットとしての  $S$  が順に生成されることになる。この  $G$  なるものは語および音の連続を作り出し、それら構成要素の間の関連を規定するものである。この  $G$  によって生成された文は相互の個々の要素が文法的な関連性もっていて、しかもすべての必要な成分をおさめたものであり、これをビーヤビッシュは SB (Strukturelle Beschreibung) と呼んだ。これらの Satz をつくりだしてゆくにあたり、その過程では統語論上の制約を受けたり、意味論、音韻論上の規則の中であらゆる可能な文が作られてゆくことになる。つまり、 $G$  は統語論、意味論、音韻論を含めた広い意味での文法性ということができよう。従って  $G$  によって作られる文は統語論的、意味論的そして音韻論的にも構造をもつことになる。つまり、Nominalität を持つ文が生成されるわけである。逸脱文はノーマルな文との関連から理解される。従って逸脱文とは不完全な SB ということになり、文を理解する根拠となるノーマルな SB とこの不完全な SB との相違が逸脱の種類と程度を明らかにすることになるわけである。たとえば 1) Das am Telefon wollte der Schuldturn nicht sagen. 2) Dort lint es Böck/dort beint es Hol, /es waldet grün und witz. この二つの文は何らかの逸脱を犯していて、不完全であることは明らかであるが、これらの逸脱は次のようなアナロジーによって初めて理解され、その特殊な効果が期待できるのである。1) Das wollte der Mann am Telefon nicht sagen. 2) Dort geht es los, dort wird es still. このように  $G$  はノーマルな文の構造を決定はするが、その構造を選んだ理由あるいは逸脱の要因を説明するものではない。そこで逸脱文を単なる統語論上あるいは意味論上の逸脱であるのか、それとも第一次構造と結びついた詩的構造を持つ逸脱文であるかを規定する仮説が必要になる。ビーヤビッシュはそのメカニズムである詩的構造  $P'$  を設定する。これが各々の文あるいは文の複合が詩的であるか否かを決定するメカニズムに

なる。GとP'が一緒に働いてある特定の詩的体系の前提のもとで可能な詩的構造を生成することになるわけである。ビーアビッシュはさらに詩性のスカラの中で任意のSBの詩性の順を決定するメカニズムPを仮説する。規則に従った詩の場合にはPとP'の機能は一致する。しかし複雑な詩的構造の場合、たとえばDie Mühen der Gebirge liegen hinter uns. Vor uns liegen die Mühe der Ebenen. ではパラレリズムと反意語の特徴づけを行うのはPで、次のような並べ方よりも高い詩性を付与するのはこのPの働きということになる。Die Mühen der Gebirge liegen hinter uns. Vor uns liegen andere Mühen.

PはGによって生成され、それと関連づけられたSBに基づいて働き、それらのSBあるいは詩性の中で位置を決める詩的構造を際立たせる。Pの基盤をなす規則は言語構造の上で作動するが、それ自体は言語外的である。これにより詩と言語学の間関係が正しく決定されることになる。Pは直観的に一般的な前提もなしに行われるものではなく、どんな規則性に基づいて詩的効果が生じるかを説明する。ここが解釈学との相違点である。

Pを一般的に書き換えるにあたり、ビーアビッシュは詩性のスカラおよび詩性のスカラの度合いを理解する経験的に与えられた能力を前提としている。自然言語の場合、文法性についての判断はかなり困難な要素を含んでいるが、それでもノーマルなものと、さまざまの著しい逸脱をはっきりと判断することはできる。同じことが当てはまるのは簡単な形式の詩の場合に限られる。詩性をめぐる経験的に与えられたスカラは根拠が薄弱なように見えるが、詩学を経験的な学問であるとするならば、その任務は文学的な内容判断で、文学作品の規範を打ち立てることではなく、どんな構造特性に基づいて効果が生まれるかを説明するものでなくてはならない。つまり、文学の評価ではなく構造特性の記述を目指すのである。つまり、詩学は文学の評価ではなく構造特性の記述を目指すものであるということになる。しかし、その場合にも言語学的文体分析という作業は意識的にせよ、無意識的にせよどんな規則性によって詩的

構造が作り出され、それがどのように理解され、判断がなされるのかを説明するものでなくてはならないし、又それだけの能力は有している。詩学はテキストの内在的特性に依存して成立するものである。従って詩学は判断を根拠づけるものではなく、効果そのそのものを受け止め、その効果の根拠となっている諸規則を決定するものでなくてはならない。一定のコミュニケーションの成立を考えてみた場合、ある程度まで完全な文法性を前提としているわけだが、詩的能力はさまざまに特徴づけられている。しかし、それでも詩的效果が、たとえば統語論的、意味論的あるいは音韻論的規則からの逸脱によって作り出されることがあるにしても、それが詩的效果を得るには、相応した独自の規則性に従って逸脱がなされているのでなければ、単に文法的あるいはその他の理由による誤りということになってしまう。つまり、詩的效果の逸脱は逸脱の条件、形式を細かく規定した逸脱の規則によって説明がつくものでなくてはならない。このような規則的な逸脱の条件と形式はまさしくビーヤビッシュが打ち立てたPに入り込むものでなくてはならない。言語学的文体論といえども、文学の内在的、自立的特性に依存して成立しうるものだと考えれば文学との関わりを標榜する文体分析の方向としては、文学作品の評価ではなくその評価の出所を説明するものでなくてはならないということになる。

ビーヤビッシュは結論として、詩学の一般理論は少なくとも次の要素を含んでいなくてはならないとしている。

- 1) 詩的な規則のさまざまなタイプの精密な性格づけおよびそれらの間の精密な性格づけ
- 2) 詩的構造の必要な種類の精密化
- 3) 生成されたテキストにPを前提として対応する詩的な構造記述を関係づけるアルゴリズム

これらを満たす条件は以下のとおりである。現象をできるだけ大きなスカラに沿って調査してゆけば2)によって満たされる諸種の条件がわかる。それとともに要求されていることは詩的構造特性のさまざまなタ

イプを精密に記述することである。それが詩学の領域における一般的叙述のそれぞれの形式に対する前提である。そうすれば1) がこのような構造的基礎をなしている規則を精密にあらわすこととなる。1) と2) はGによって生成されたSBを前提としていることは先に述べた通りである。

もちろん、ビーヤビッシュが打ち出したこのような理論装置によって詩的能力についての記述が十分になされと期待するにはかなり無理があるといえようし、こうした理論をたとえば散文の文学作品へ押しはめてゆこうとする際には、この方法を諒解するとしてもまったく同じく適用しがたいものがあるはずで、たとえ適用しえたという仮定にたっても、それがそのテキストの自立性との関わり合いを考えてゆくうえでも多くの問題が立ちはだかることになる。そこには形式言語学の諸要因の協力が必要であろうし、さらにまた心理学的、精神分析的、歴史的、社会学的そして当然のことながら文学的、その他の要因の協力があって初めて文学テキストにおける詩的逸脱の問題を説明することになるのかもしれない。しかしそれでも言語学的文体論は文学作品の判断の出所を説明できるという有効性を頼みとしながら、さらにその可能性を探るとこは十分に意義が認められるべきであろうと考える。

## 参考文献

- 小林秀夫：文体論論考 みすず書房 1976  
倉又幸一：文体論 In：言語学入門 大修館書店 1980  
寺田透：ことばと文体 河出書房 1975  
ギロー P. 島岡茂訳：言語活動の二次的機能（文体論と韻律論）In：言語の本質 紀伊国屋書店 1973  
ギロー P. 佐藤信夫訳：文体論－言葉のスタイル 研究社 1959  
ムーナン G. 福井芳男訳：言語学とは何か 大修館書店 1999  
原子郎：文体序説 新読書社 1971  
リー V. 栗原裕／荒木正純訳：ことばの美学 大修館書店 1975

- リファテール M.・福井芳男他訳：文体論序説 朝日出版 1978
- Beutin W. : Sprachkritik – Stilistik Berlin 1976
- Bierwisch M. : Poetik und Linguistik In: Mathematik und Dichtung  
München 1971
- Fleischer W./Michel G. : Stilistik der deutschen Gegenwartssprache  
Leipzig 1979
- Möller G. : Praktische Stillehre Leipzig 1980
- Sanders W. : Linguistische Stilistik Göttingen 1977
- Sandig B. : Stilistik Berlin 1978
- Schneider W. : Stilistische deutsche Grammatik Freiburg 1969
- Seidler H. : Allgemeine Stilistik Göttingen 1963
- Seiffert H. : Stil heute München 1977
- Sowinski B. : Deutsche Stilistik Frankfurt a.M. 1975
- Spitzer L. : Stilstudien I, II München 1961